《公開講演会記録》

バーリンホウ（'80後）の中国若者文学

中国文学翻訳家　泉　京鹿

ご紹介にあずかりました泉京鹿と申します。矢吹先生のご紹介にもありましたように、この名前は、昨年結婚するまで、生まれたときから使っている本名でした。日本では「東京の京に馬鹿の鹿」と自己紹介していましたが、北京では「北京の京に梅花鹿の鹿」と北京に縁があることを強調した自己紹介で、ウケを狙っていました。

おそらく私よりもずっと長く、中国と深くおつき合いをしていらした諸先輩方の前でこのようにお話しをさせていただくことは、とても緊張いたします。

私は大学を卒業後すぐに北京に留学し、昨年まで、基本的にはずっと北京で生活していました。これまでの人生の半分とはいいませんがそれに近い、16年ほどを中国で生活していましたので、まだどこか日本の生活に馴染めないところもあります。とはいえ、私が日本を離れる前に比べると、池袋や新宿あたり、銀座やこの新橋でも、街で中国語がたくさん飛び交っているので、それを耳にするたびにホッとしているような次第です。

「70後」と「80後」

「80後（バーリンホウ）」はご存知のように「80年代生まれ」の若者たちという意味です。その80年代生まれの作家たち、それから同じく80年代生まれであるその読者たちについて、私が翻訳してきた作品や読んできた作品を通じて、また「70後（チーリンホウ）」、70年代生まれの作家や作品とも比較しながら、お話しさせていただきます。

私自身は70年代生まれです。70年代といっても71年ですから、60年代に近い方ですので、正直にいって、今の80後にはジェネレーション・ギャップを感じることも少なくありません。ですが、だからこそ、自分の世代とはギャップのある彼らの作品やその世界を読むことや翻訳することに、喜びや意義を感じています。

今や年齢でいえば30代にさしかかり、中国社会の経済界、文化界を担う中心的世代ともなった80後ですが、彼らの世代が注目されるようになり、「80後」という呼び方自体が使われるようになったのは、その大部分がまだ10代から20代前半だった２００４年前後のことでした。今

ではこの世代全体を指して使われていますが、もともとは80年代生まれの若い作家たちを指す言葉として使われたのが最初だったはずです。この点からも、この世代の作家たちやその作品がこの80年代生まれを象徴するものであり、これまでの世代とはきわめて異質な存在として注目を集めたことがわかります。

この世代は、ご存知のように１９７９年にスタートした一人っ子政策の影響で、兄弟姉妹のいない、一人っ子が多いということが一つの特徴です。ほかに兄弟がいる場合でも、末っ子が多いということになります。「小皇帝」という言葉に象徴されるように、祖父母、両親から大切に手をかけられて育てられた子供たちです。

また、80後は食べるものに困ってひもじい思いをしたことがない、という人が格段に増えた世代でもあります。大都市であれば、中学生になる頃には、自分の家や身近な近所の家にパソコンや携帯電話、自家用車があり、海外に出張や旅行に行くということがそれほど特別なことではなくなった最初の世代です。

上の世代から、「另類（リンレイ）（オルタナティブ）」、いわゆる「新人類」と呼ばれた中国の70後は、幼い頃には下放された両親と離れ離れに暮らしていたり、親戚などに預けられてあちこちを転々としていたり、食べるものも十分ではなく、ひもじい、辛い思いをしたという人が少なくありません。私は彼らと同世代ですが、私たち日本の70年代生まれにはそういう記憶がないので、この点においては日中間での子供時代、思春期の体験の違いが顕著です。

中国の70後は、その後、中学生や高校生の時に89年の天安門事件を目の当たりにし、また、改革開放で豊かになっていく中国や世界の国々の状況をつぶさに見て、物質的な豊かさに憧れ、それを欲し、ハングリーにそれを求めるようになります。少なくとも、みんながみんな、それほど生活レベルがかわらない社会主義的なものにこだわったり、縛られたりするようなことはありませんでした。どちらかといえば、そこから逃れたがった世代です。従来の価値観、単位（注・既存の社会的組織的枠）社会を飛び出して、頑張れば豊かになれる、もっといい生活ができると信じて、勉強や仕事、商売に必死に励み、豊かさを求めて海外に留学したり、起業したりすることがブームになりました。

70年代生まれの作家といえば、『上海宝貝』（邦訳は『上海ベイビー』文春文庫）が１９９９年に中国で発禁処分となったあと、世界50カ国以上で翻訳が出版され、各国でベストセラーになった衛慧が代表的な存在として知られています。この『上海ベイビー』の前とその後にそれぞれ書かれた衛慧の作品、『像衛慧那様瘋狂』『我的禅（嫁給佛）』（邦訳は『衛慧みたいにクレイジー』『ブッダと結婚』ともに講談社）という二つの作品を翻訳しました。

自伝的小説ともいわれる作品の多い衛慧ですが、『上海宝貝』には、その大胆な性描写をはじめとする退廃的な若者の生活、ストレートな欧米の社会や文化へのあこがれ、賛美が顕著でした。それは中国の伝統や文化、社会への反発の裏返しでもありましたから、問題として取り沙汰され、ひいては発禁、という結果に至ったのです。

実際、70年代生まれの彼女たちが現実に生きてきた歳月は、その作品に描かれている世界同様、まさに中国の社会や生活、価値観が大きく変化してゆく一つの転換期だったのでしょう。

そんな時代に青春時代を過ごし、社会へと飛び出していったこの世代の作家たちは、これまでタブーといわれてきたも

のに対して、まっすぐに向き合い、描こうとしました。

読者の多くは、作家自身と同世代かさらに若い人々でしたが、前衛的なその作品の世界に憧れを持ちながら、それは遠い世界のことではなく、「自分だって……」と思いながら読んでいた人が少なくなかったようです。夜な夜な世界各国から来た外国人のあふれるレストランやバー、ディスコ（今ならクラブ、ですね）などに出入りしたり、親の月給に相当するくらいの高価ブランドの服や化粧品を買ったり、海外に留学したり……。

そんな、「してみたい」と思うことを実際にやってみるために、純粋に欲望を満たすために、懸命に努力し、次々にそれらを手に入れてゆく。たとえば、そういうことでした。幼いころにお腹いっぱい食べられなかったという苦しい思いを経験しているからこそ、食べ物に貪欲でぜいたくな食べ物にも目がなく、もっといい生活をしたいと願い、そのための努力は惜しまない。それが、70年代生まれの人々の生活に顕著なモチベーションでした。

そして、この世代の作家たちが大胆な性描写を作品に盛り込むのも、これまでタブーであったものだからこそ、描きたいという欲求があり、また読者が欲するからにほかなりません。また、従来の価値観への挑戦でもあったのでしょう。そのため、衛慧のように70後の作家の作品でとくに過激な性描写などが取りざたされるのは、彼らの世代の特徴でもあり、思春期の若者たちの社会の風潮に対する反逆の形であったのです。

田原

以上の二点をふまえて70後と比べてみると、80後の特徴がよくわかるのではないでしょうか。簡潔にいうと、まず、大都市だけでなく地方都市や農村で育っていても、ほとんど食べ物に困ったことがありません。そして日本を含む欧米社会、世界との距離感が、70後に比べ、ずっと近くなっています。外国へいくのは、もう憧れでも目標でもなく、選択肢の一つになっていて、その気になれば比較的簡単に選べる、生活の中にある、と言えばいいのでしょうか。読者たちの世代の生活がそうであると同時に、この世代の作家が描く作品の中にそれは現れています。日本のアニメ、映画、ゲーム、アイドルなどが頻繁に登場人物たちの会話に出てきたり、家族や友人が海外に旅行に行ったり、外国人が身近にいたり、ということがごく自然に物語の中に描かれています。

もうひとつ、70後の作品ではとかく取り沙汰された性描写ですが、私自身がこれまでに読んできた80後の作品には、翻訳したものも含めて、せいぜい30作品くらいのサンプルしかありませんが、具体的な性描写といったものがほとんどありません。それは、恋愛や性をテーマにしていない、ということではなく、この世代にとって、もはや性はタブーではないため、とりたてて強調するものではなくなった、ということなのです。

昔、日本でもベッドシーンなどがタブーで、テレビや映画などで男女が見つめ合ったら暗くなり、次の場面は朝になっているというふうに、男女の間に何かがあったことの描写がすっぽり抜けて

いて、観ている者が想像するしかないという時代があったと思いますが、そんな感じです。80後の小説でそういうシーンが極端に少ないのは、タブーに挑んできたその前の世代との一番の差かもしれません。

タブーのない世代

たとえば、今年の6月に邦訳が出たばかり拙訳・郭敬明の『悲しみは逆流して河になる』ですが、高校生の恋愛、いじめ、親との葛藤などとともに、妊娠、中絶といった問題が描かれています。当然、性もテーマの一つと言っていいものであるはずですが、具体的な性行為の描写はなく、その後のことがストーリーには重要であり、性描写そのものには重きが置かれていないことがわかります。

そのことについて、この郭敬明、それから以前翻訳した『双生水莽』（邦訳『水の彼方〜Double Mono〜』講談社）の著者である田原にも、またアメリカの『TIME』の表紙を飾ったこともある80後の春樹という作家にも直接尋ねたことがあります。彼らの答えは「前の世代がやっているのをさんざん読んできたから」「自分にはほかに書きたいことがあるから」「読者が読みたいのはそういうものではないから」というもので、そういったものを描かないことが自然であると同時に、半ば意識的に、そういうものを排除してさえいるような印象も受けました。

では、そんな彼らの作品を、日本の同世代はどのように読んでいるかといいますと、この数年、横浜にある母校のフェリス女学院大学での集中講義で、学生たちにいくつかの作品を読んでもらい、感想を聞いて見たことがあります。彼女たちは中国語学習者ではなく、ほとんどが中国に行ったこともないという、ごく普通の女子大生たちです。彼女たちは声をそろえて、「地名と人名を変えたら、日本の小説を読んでいるのとかわらない」「読みやすいけれど日本の携帯小説よりは文学的」「感覚がほとんど同じ。共感することばかりでびっくりした」とその感想を語ってくれました。

彼女たちの話は、私には「目からうろこ」でした。翻訳している私にとって、80後の作品は、70後以上に価値観の違いに戸惑うことが多かったのですが、これは中国だからというのではなく、日本でも同じだということなのでしょう。実際、私が長年日本を離れていたからということもあるかもしれませんが、日本の10代、20代の若い人の感覚には理解できないところもたくさんあります。でも、それは日本独自、中国独自というものが若干はあるとしても、多くは世代独特のもので、日中間の違いは私たちの世代よりもずっと少なく、小さくなっているということではないでしょうか。

お手元にお配りしたのは、朝日新聞の日曜日に月2回挟みこまれている横書きの紙面『GLOBE』で連載している「世界の書店から」というコラムです。私は北京を担当していまして、3カ月に一度くらいの割合で北京のベストセラーを紹介しています。すでに『GLOBE』紙上に掲載されたもので、ネット上でも読めるようになっています。

たとえば、2009年6月8日付の『一族』と『家』の重さ、ささやかな幸せ」というタイトルの記事ですが、ここで紹介している『西決』の著者の笛安は、記事にもあるようにパリに留学経験のある80後作家です。この作品では、80後の作品ではよくテーマになる親との葛藤だけでなく、それ以外の家族、親族との関係や感情が丁寧に描かれています。80後の中では珍しい、貴重な存在の作家だと思います。この記事にも書きました

講師の雑誌記事

が、中国では「おじ」や「おば」、「いとこ」などの呼称が、父方か母方か年長か年少かで、明確に区別されています。一人っ子政策の結果、こうした呼称はこのままでは無形の遺物となり果ててしまいます。この作品の中では、いとこ同士が兄弟のような存在で、それぞれの家族もとてもちかしい家族として描かれていますが、もともと中国語の「家族」は日本語の「家族」より範囲が広く、「一族」「親族」にあたります。この記事では、たまたま同じ時期にベストセラーになっていた張愛玲の作品とともに、時代はまったく異なるのに、一族の話がこまやかに描かれ、中国の「一族」「家」の重さを感じ、非常に面白く読みました。

それから、２０１１年1月24日付の「80後が見せるネットと書物の力」というタイトルの記事では小説だけでなく、ブログなどを通じて政治に対して、若者の気持ちを代弁した挑発的な発言をするなど注目も集めている80後作家・韓寒の最新作を紹介しています。彼の小説には、政治や社会に対する風刺を盛り込んだメッセージがこめられているものが多いです。

韓寒といえば昨年、「国内に対して平和的なデモのできない民族が、外国に対していかなるデモをしたところで何の価値もない。そんなものは単なるマスゲームだ」と結んだ文章を、中国で「国恥記念日」とも呼ばれる満州事変の発端となった柳条湖事件が起こった9月18日にネット上にアップしたことが波紋を呼びました。その直前に発生した尖閣諸島沖漁船衝突事件を受けて、日本に抗議するデモを起こそうという中国の若者たちの動きに対するものだったからです。結局、この文章は中国当局によって削除されましたが、その当時で総アクセス数４億を超えていた彼のブログですから、アップされて5分後に削除されても、あっと言う間に膨大な数のコピーがあちこちに転載され、いまでも随所で見られるようになっています。

最新作の『１９８８：我想和這個世界談談』（「１９８８：この世界と語りたい」）の中には、まだ中国ではタブーになっている天安門事件のことが書かれています。といっても、そのまま書いてあったら、おそらく発禁になっていたでしょう。そのものの描写やそれを指す言葉はまったく、出てきません。主人公が兄のように慕う大学生が、ある年の春から夏にかけて北方＝北京に行って、亡くなります。具体的な時期も理由も書いていません。

しかし、中国人なら誰でも知っているドラマの主題歌が流行った翌年に彼が死んだとあり、その流行が１９８８年だったことから、それが１９８９年の春だということがわかるようになっています。何気なく読んだら見過ごしてしまいがちですが、ここには明らかなメッセージがこめられています。あからさまな政府批

判をするのではなく、このような巧妙な形で読者へ、社会へ、メッセージを発するのが韓寒です。

これらの作品はまだ邦訳はありません。お配りしたものか、インターネットで『GLOBE』の記事を読んでいたければもう少し詳しくご理解いただけると思いますのでお目通しください。

彼らの素顔

さて、私は北京に住んでいたこともありまして、翻訳をした作品の作家さんたちとは、翻訳に際して実際に会って作品について語りあったり、その後も親しいおつきあいをさせていただいたりしています。彼らの素顔について少しお話ししたいと思います。

先ほども何度か名前を出しましたが、70後の衛慧とは、プロモーションなどで3回、一緒に日本に来ました。同じ部屋で寝泊まりしたこともあります。上海では、何度か一緒に上海ガニを食べました。レストランで食べたこともありますが、フランス租界にある古い洋館を改装した彼女の家で、彼女のお母さんが市場で買ってきてくれた洗面器いっぱいのカニをお腹いっぱい食べたことが忘れられません。『上海ベイビー』を書いた当時の彼女は、主人公のココさながらに、お酒もたばこもディスコも大好きな、かなり派手な女性だったようです。

私が親しくなったのはそのあとのことで、タバコもお酒もディスコ通いもまったくしなくなっていました。その後、私が翻訳した『上海ベイビー』の続編である『ブッダと結婚』の主人公同様、仏教に帰依して、非常にシンプルな生活を送っていました。しばらくして、少しはつきあいでお酒も飲むようにはなりましたが、普段はひたすらお水を飲むだけで、お化粧もせず、上海ベイビーのころの彼女のイメージとはかけ離れた、ほんとうに地味で、静かな人間に変わっていました。

仏教は、これは70後、80後に共通して、この数年、流行っているといっていいかもしれません。仏教徒になったり、仏教思想の本を熱心によんだり、という作家、若者たちが増えています。衛慧だけでなく、田原、アニー・ベイビーもそうでした。

その中でも、80後の田原は仏教に帰依したことから、今ではまったく動物性の食品を口にしない、かなり厳格なベジタリアンです。彼女とも二度ほど日本国内を旅行したことがありますが、これは正直言ってかなり大変でした。

日本食にはだしに鰹節がつかわれていますが、彼女にはこれはアウトです。日本そばが大好きな彼女とお蕎麦屋さんに入っても、彼女はそばつゆを口にできません。昆布だしにみりんと醤油でベジタリアン用のめんつゆをつくってくれた親切なお蕎麦屋さんもありましたが、普段はわさびと醤油をつけながら食べていました。そんなことで外では自由に食事ができないことが多く、事前にお店を見つけられなかった場合に、コンビニエンスストアでお赤飯のおにぎりを買ったりしたことも少なくありません。日本料理はシンプルですが、だしの入っていない料理が実に少なく、ベジタリアンには意外に難しいということは、彼女と一緒にいてはじめて気がつきました。

本人は70後ですが、80後に絶大な人気のあるアニー・ベイビーとは、東京、箱根、京都、奈良、松山、木曽路、松本などを二週間かけて旅しました。彼女も仏教思想を熱心に勉強していますが、田原のような厳格なベジタリアンではありませんので、あちこちでいろいろ食べ歩きをしました。中でも、京都の町屋を改造したカウンターの料理屋さんはとても気

に入っていたようです。この8月に彼女の5年ぶりの新作長編『春宴』が発売されました。私も彼女から送られてきたその本を最近読んだばかりなのですが、この小説のラストシーンは京都が舞台でした。主人公の二人の中国人女性が日本酒を飲みながら語り合う場面を読んで、私と一緒に飲んだ時の記憶が小説になっているのを、とても不思議な気持ちで読みました。

　またこの作品には、明記されているわけではありませんが、柳宗悦（やなぎむねよし）の『手仕事の日本』（岩波文庫）という本を片手に、日本の伝統工芸の職人さんたちの仕事の現場を丁寧に見て回った彼女が感じた、日本の伝統工芸、手仕事への思いがあふれています。初版１２０万部で、現在中国各地でベストセラーになっています。ぜひ日本語に翻訳して紹介したいと思う本です。

　最後に、郭敬明ですが、『クーリエ・ジャポン』という雑誌の9月号に、郭敬明が自宅でくつろぐ写真が掲載されています。この写真の通りのイケメンです。

　彼に実際に会う前、雑誌やネットで見るといつもあまりに美しいので、「きっとメイクとライトのあて方など撮影の技術のおかげだろう」などと失礼なことを考えていたのですが、実際に会ってみたら、ほんとうに写真のとおり美しい、素敵な男の子でした。

『悲しみは逆流して』（郭敬明）

　でもある日、昼間オフィスで会ったら、なんとなく雰囲気が違っていて、夜、レストランで待ち合わせをしたらいつもの顔になっていたので、昼間見たのはスッピンの顔で、普段はメイクをしていたことがわかりました。でも、素顔のほうが可愛らしいといいますか、そのままでもほんとうに美しかったです。高級ブランドで身を固め、運転手つきの高級外車に乗っているその姿は、とくに中国では汚れやすいからとあまり好まれない真っ白な服を着ていることの多い彼は、童話の中に出てくる王子様のようです。

　ベストセラー作家としての郭敬明には、盗作、剽窃疑惑がつきまとい、毀誉褒貶がたえませんが、独特の美しい言葉をつむいだ文章で、次々に作風の違う作品で読者を楽しませてくれるその筆力は貴重な存在だと思います。さらに、毎月50万部を超える売り上げを誇る雑誌を何冊も発行する編集者として、若手クリエイターや斬新な企画を生み、育てるプロデューサーとしてのその才能とビジネスセンスには、目を見張るものがあります。日本にはまずいないタイプの作家で

雑誌に載った郭敬明

すし、年々厳しい状態にある日本の出版業界から見ても非常にまぶしい注目すべき存在であることは間違いありません。

彼の作品にも日本のサブカルチャーはつねに登場します。彼らにとって、日本とはとても身近な国です。昨年初めて訪日し、さらに日本が好きになったと言っていました。これからも彼の作品の中には日本のものがさまざまな形で出てくるのではないでしょうか。

郭敬明だけではなく、田原も、アニー・ベイビーも、編集長として文芸誌を発行しています。韓寒も『独唱団』という雑誌を創刊しましたが、創刊号のあと、事実上の廃刊となっています。彼らのほかにも、多くの80後作家が編集長の雑誌が発行されています。日本の雑誌からコンテンツを購入して翻訳したものを掲載するなど、彼らはみな日本の文化が大好きで、積極的に取り入れることにとても貪欲です。

それに対して、残念ながら日本の若い世代、いえ、若い世代だけでなく、日本人はまだまだ現代中国の彼らの生活や文化、彼らが読んでいるもの、見ているもの、聞いているもの、好きなもの……そういった身近なものをまだまだ知らないと思います。

この話をするととても長くなってしまいますが、日中間の翻訳の不均衡をみれば、それは明らかです。二年ほど前に、２００９年に調査をしたことがあるのですが、日本の小説の中国語訳は確認できただけでも年間百点を超える数が翻訳、出版されていました。かつては海賊版もありましたが、今はきちんと版権を取得しています。人気のある作品は版権取得に数社が争って高値で入札し、翻訳・出版に至るといいます。

しかし、中国の現代小説で日本語になっているものは、年間百点どころか、全部で数十点も危ういところです。小説以外のノンフィクションの翻訳は増えているようですが、小説は、中国で日本の小説が読まれているのに比べると、悲しいほどごくわずかです。

ですから、もっと日本の若い人に中国の小説を読んで、同世代がこんなにも同じ感覚をもっていることを、同時に同世代なのにまったく違う感覚ももっていること、また、彼らがこんなにも日本を知っていることを、そして彼らの文化や生活の中にもとても素敵なものがたくさんあることを知ってほしくて、私はこれからもまだまだ翻訳を続けたいと思っています。

先輩方の世代には、若い世代の作品は文学的にまだまだ未熟で読むに耐えない、などとお感じの方も少なくないかもしれません。しかし、これからの中国を支えてゆく世代が、何を考えて、感じて、何を伝えようとしているのか、機会がありましたら、ちょっと覗いてみていただければ嬉しいです。

本日はどうもありがとうございました。

（9月2日・講演会）

講師略歴（いずみ　きょうか）

１９７１年東京都生まれ。フェリス女学院大学文学部卒。
北京大学留学。博報堂北京事務所勤務を経て、フリーランスに。
訳書に衛慧『衛慧みたいにクレイジー』『ブッダと結婚』（講談社）
アニー・ベイビー『さよなら、ビビアン』（小学館）
余華『兄弟』（文芸春秋）、田原『水の彼方〜Double Mono〜』
郭敬明『悲しみは逆流して河になる』（講談社）